

いた学習を示した。

### (2)第2実験系列

第2実験系列では、次元外移行課題を用いて、学習を困難にしている要因を分析し、そうした要因による学習妨害効果を低減する手続を見出すことを目的とした。そして、不適切な刺激要素から適切な刺激要素への注意反応を迅速かつ円滑にスイッチするための条件について検討した。

実験4では個体内要因と次元の優位性、または弁別容易性との関連で、実験5では優位な次元への移行学習における転移の影響について、実験6では不適切次元数の操作との関連で検討を加えた。

その結果、形次元の優位性が示され(実験4)、移行事態において、形が適切次元となる時、注意反応のスイッチがスムーズに行われ(実験5)、形が不適切次元である時、逆にスイッチが遅れること(実験6)が示された。さらに、過剰訓練により学習の妨害効果が認められた。不適切次元を除去したり(実験6)、適切次元を付加したり(実験7)することにより、学習を円滑にかつ容易に遂行できることが示された。

### (3)第3実験系列

第3実験系列では、単一刺激要素学習から複合刺激要素学習への移行学習である Component 移行課題を用いて、刺激の選択過程の検討と複数の刺激要素への反応の形成過程を分析した。

実験8と実験9では普通児と精神遅滞児について large-N アプローチにより検討し、実験10では、就学前の自閉症児、精神遅滞児および学習障害児22名の臨床例について small-N アプローチにより検討した。

その結果、年少児ほど one-look 的反応を示し、年長児になるほど multiple-look 的反応が強くなることが示された(実験8)。MA 4歳および5歳の精神遅滞児は、正刺激反応型および偶然水準反応型の比率が普通児よりも高い値を示した(実験9)。さらに、臨床例に関して、実験8、9同様の刺激選択得点、反応パタンの分析に加え、群別(障害別、MA別、IQ別)による検討を行った(実験10)。

普通児群、精神遅滞児群、症例児の資料から、注意の幅はMAの要因による影響を受け、発達水準の増加に伴い、S-R連合型反応から one-look 型、さらには multiple-look 型反応へと移行することが示唆された。

筑波大学

教育学博士

井田範美 精神遅滞児における Montessori's sensory principles に関する実証的研究：モンテッソ

### ーリの教具及び教授法の実験的検討

本研究は MONTESSORI METHOD のうち、SENSORY METHOD を中度精神遅滞児に適用し、その実践の方法を検討する過程で、教授原理としての SENSORY PRINCIPLES の有効性を実証することを目的としている。具体的対象としては、①感覚教具の原理及びその学習システムへの展開、②同一性、対比性及び類似性の方法原理、③three period lesson、④感覚機能の活用原理——感覚刺激の孤立化から感覚間の連合機能、単純刺激から複合刺激、⑤感覚的手続に基づく知的学習の原理——文字学習、数学習などである。

以下、主な結果について要述する。

#### 第1部(序論)第1章～第3章 省略

#### 第2部(感覚教具の PRINCIPLES 及びその展開に関する実証的研究)

第2部第1章 個々の感覚教具の原理について検討し、刺激体の配列、呈示の工夫によって、遅滞児は同MA水準の普通幼児との比較の結果の多くは近似的傾向が得られた。

self-control of error は集中機能、認知機能が不可決と推察され、教具及び教授法の一層の工夫が示唆された。感覚レベルの概念形成には模倣学習が有効であり、また対象児の興味・目的が教具活動、教具目的に適合するとき、テンシヴかつ集中的遂行が観察された。

第2部 第2章 触筋覚—視覚では、教具操作を通して両感覚間の連合及び転移の有効性が示唆された。視覚—聴覚では、絵カード及び three period lesson を使用し、聴覚的遂行の劣位が把握された。

第2部 第3章 ①形、大きさ、色 ②文字などによる弁別学習システムの中に、教具の原理を含む諸方法原理を導入することにより、システムの法則性に注意を集中させる指導法の有効性が示唆された。

#### 第3部(感覚的学習の PRINCIPLES に関する実証的研究)

第3部 第1章 第1節 文字の弁別的マッピング訓練では練習法の工夫が示唆された。文字呈示法として、視覚だけの方法と視覚に書写を加えた方法とでは、呈示文字の再認、再生のいずれの場合でも、呈示法の前者よりも後者の方が良好な結果を示し「書く」ことの先行的指導法を実証した。また three period lesson の原理を適用して、文字の視覚的、聴覚的呈示を行った後の結果では、視覚再認、聴覚再認、聴覚再生の順で平均反応率の低下を観察した。

第3部 第1章 第2節 砂文字学習による達成は視読、書写、触読の順であった。砂文字は文字版に枠組がないために、触筋覚のコントロールができず、触読は非

常に困難であった。

砂文字版の短所を補うみぞ文字版(試作)の試行の有効性が得られた。さらにみぞ文字版では、文字形の触覚→視覚の転移が示された。

第3部 第2章 MONTESSORI の数学習では言語との有機的活用が重視されるが、「具体的抽象化」の指導原理の一方的操作ではなく具体と抽象のフィードバック的操作の重要性が示唆された。感覚的手続によるアプローチ例として、①計数操作ならびに計算操作では、計算棒の有効性が実証された。②数の保存ならびに多少判断では、同MAの普通幼児に比較してみせかけの形態による知覚判断に影響されやすい。③数と諸感覚の結合では、感覚刺激の呈示法と感覚事物の系列化への工夫が示唆された。

以上第2部及び第3部を通して、同MAの普通幼児との比較から、刺激・呈示の工夫により、教具及び教授法の適用の有効性が示唆された。

東京都立大学

文学博士

岩立志津夫 幼児言語における語順の心理学的考察

本論文は、テープ・レコーダによって得られた複数の子供の資料の分析と幼児についてなされた実験によって、子供の言語発達に見られる変化を「語順」という視点から明らかにしている。

第1章から第4章においては、本研究と関連のある内外の諸研究が概観され、第5章においては、本研究の目的について述べられた。

第6章では、Schlesinger (1971) の語順説を検討するためになされた1人の男児に対する縦断的研究について報告されている。他動詞文の分析の結果、語順の一般的傾向は、Schlesinger の語順説を支持していなかった。しかし、いくつかの動詞ではその動詞独自の語順がみとめられた。

第7章では、幼児言語におけるいくつかの文法の適否が論じられた。

第8章では、第6章の補足として、他動詞以外の述語を用いた文の語順が分析された。主な結果は次の通りである。①各述語での修飾要素の数は月齢の増加とともに増えていく。②各述語での一定の語順は月齢の増加とともにできてくる。

第9章では、第6章同様、Schlesinger の語順説を検討するために2歳5月から3歳9月までの5人の子供の発話が録音され分析された。分析されたのは第6章同様他動詞文であった。主な結果は次の通りである。①5人の子供の総合的な語順傾向は、Schlesinger の語順説を

支持していた。②しかし、個々の子供の結果は必ずしもSchlesinger の語順説を支持していなかった。

第10章では、林部(1976)が提出した単文理解の4段階説を検討するために、同一の被験児に対して2つの実験が実施された。主な結果は次の通りである。①格助詞を正しく理解した反応は4歳前後からはじまる。②格助詞を正しく理解した反応が生じる以前に、意味的關係による反応、すなわち語順ストラテジーによる反応が生じる。③語順ストラテジーによる反応が3歳半前後から4歳にかけてはじまるが、これと密接に關係して格ストラテジーも使われはじめることが被験児の誤解答の分析などを通して示された。格ストラテジーとは、名詞句があるとそれを優先的に動作主格とするもので、1名詞句文でも生じ、他の名詞句との語順を考えなくともよい。

第11章の総合的考察では、まず研究の流れと結果の要点について述べられ、そのあと総合的視点からの考察がなされた。主な考察は次の通りである。

一文中の平均語数の増加に関して、①一文中の平均語数は言語発達をみる場合の基礎的尺度で、発達にともなって増加する。②平均語数の増加には、修飾要素の増加がその背景にある。③ただし、平均語数の増加は、修飾要素の増加からだけでは説明できない。語数の増加には言語処理能力の向上が深く関与している。

語順に関して、①日本語は語順に関する制限が弱い言葉であるのに、日本語習得の初期相ではなんらかの語順がみとめられる。②ただし、語順の現われ方は単純ではなく、次の4つの発達段階が考えられる。第1段階：語順のない段階。第2段階：特定格によって語順が決まらない段階。ただし、個々の述語ではそれぞれ独自の語順がある場合もある。第3段階：特定格(例えば、動作主)によって語順が決まる段階。第4段階：格助詞によって、言語理解や言語発話が可能になる段階。③本研究全体からみると、第6章で不備が指摘されたSchlesingerの語順説は、全面的に否定されるべきものではなく、ある時期(上記の第3段階)に限定すれば、その時期の語順を適切に説明することができる。

京都大学

文学博士

高木 修 態度構造及び態度と行動の關係の研究

態度に関して多数の研究者が共通して仮定することは、(1)態度がいくつかの成分から構成され、一定の方向で構造化されていくこと、および、(2)態度がその保持者を方向づけ、対象に向けてある特定の仕方では反応させること、である。この論文は、これら2つの基本的な態度特性を調査に基づく経験的資料によって確認し、その特